

2019年度人権ゆかりゼミ 10月9日レジメ

「都名所図巻」 図版は46紙、全3巻の最後まで配布します。

前回の読み残し分（前回分に重複しています）

35 紙

宇多野からその北東部、西賀茂に一带を描く。

（上段）

とうじゐん（等持院）

衣笠山山麓にある臨濟宗の寺院。古くは仁和寺の塔頭であったが、足利尊氏によって禅宗に転宗した。以後足利将軍家の菩提寺とされた。

みやうしんじ（妙心寺）

双岡の東にあり、臨濟宗の大本山の一つ。南北朝の初期に、花園上皇の離宮を寺院に改めて開山した。政治に巻き込まれて浮沈が甚だしかったが、江戸時代には多くの諸大名の菩提寺を塔頭として発展した。

たかゝみね（鷹ヶ峯）

徳川家康より、大文字山北側の地を与えられた本阿弥光悦が、元和元年に拓いた集落。日蓮宗を信仰する芸術家が居を構え作品を生み出した。中心に光悦寺がある。

（下段）

ひらの（平野）

衣笠山東麓一带に広がる村であるが、中心は平安時代以来の古社平野神社である。図に描かれる社殿は寛永年間に西洞院時慶が建立したもので、比翼春日造と呼ばれる。

にしかも 付まん中のさか（西賀茂 付真中の坂）

平野から大きく北に移動して、上賀茂神社の賀茂川を挟んで西側に広がる西賀茂を描く。図にいう「真中の坂」とは、杉坂を経て丹波に抜ける長坂のことである。

36 紙

西賀茂村の南東に広がる一带を描く。

（上段）

ふなをかやま（船岡山）

京都盆地の中央北にあり、平安京建設ではその基準点ともされた。山麓では緋毛氈を敷いて酒宴が開かれている。

かみかも 付けいば（上賀茂 付競馬）

京都盆地の鎮守社でもある上賀茂神社を描くが、社殿の様子は実際と合わない。五月五日に行われた競馬を大きく描く。

【平安京中検非違使の事 放免】

投獄された罪人の内から放免された屈強な者を警察権力の手下とする。



「法然上人絵伝」巻 33 法然の弟子安楽坊が六条河原で処刑される場面
建永 2 年（1207）の事件。



賀茂祭りの行列に参加した放免。（摺衣と犀の銚）
賀茂祭りは元禄七年（1694）に復活した。

（下段）

大とくじ（大徳寺）

船岡山の北側に位置する臨済宗の大本山の一つ。大燈国師の開山によるが、花園天皇・後醍醐天皇の帰依を受け勅願寺となったが、室町時代は冷遇された。信長の葬儀が行われるにいたって復活し、江戸時代は大名の菩提寺を多く塔頭に抱え、寛文年

間には最盛期を迎えていた。

おふみや（大宮）

船岡山周辺から北側に広がる地域。大徳寺や今宮神社など、多くの社寺を有する。

いまみやおやま（今宮おやま）

大徳寺の西北に鎮座する。この付近は紫野と呼ばれ、疫病流行時には御霊会が行われた。近世には付近一帯の鎮守社とされ、桜花の名所でもあり、花の満開の三月一〇日には、やすらい祭りが行われた。

37 紙

京都盆地の北山中一帯を描く。

（上段）

いわや（岩屋）

雲ヶ畑の西北、栈敷ヶ嶽の西南山中にある志明院をいう。岩屋不動とも称され、修験の修行場でもあった。桜の名所でもある。本堂北側の神降窟には香水が湧き、薬水として多くの巡拝者が訪れた。

いわやのたき（岩屋の瀧）

本堂のさらに奥にある瀧で、飛龍の瀧とも呼ばれる。この滝ノ背後の断崖にある洞窟で、弘法大師が護摩法を修したと伝える。この洞窟は歌舞伎「鳴神」の舞台でもある。この話はこの瀧が賀茂川の源流とされることによる。

きふね（貴船）

同じ北山山中ではあるが、山を隔てて東側の貴船川上流に祀られる貴船神社。賀茂川の水源地の一つで、平安京の祈雨止雨を司る神として崇敬された。

（下段）

くらま（鞍馬）

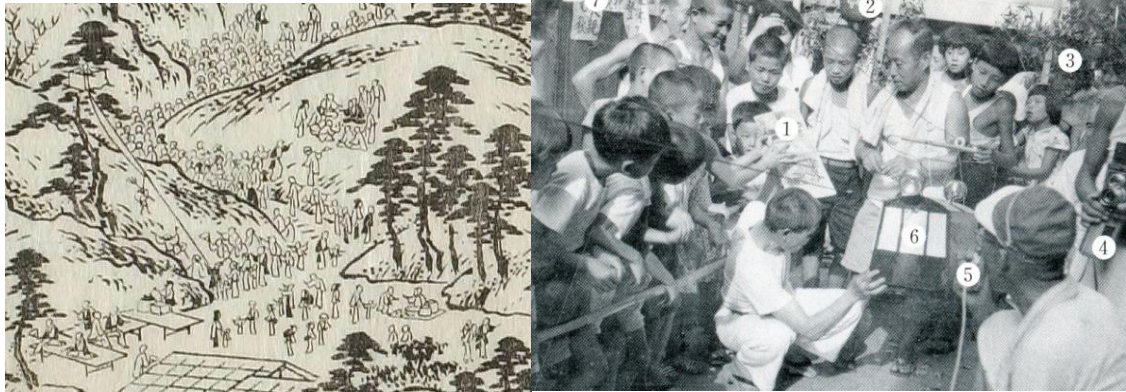
貴船社を祀る谷のさらに東の谷、鞍馬川上流の鞍馬山南麓に建立された寺院で、本尊は毘沙門天。平安京の鬼門の守護神とされたが、室町時代以降は商売繁盛の神とされ、京都町衆の信仰が盛んとなった。

ふごおろし（畚降ろし）

鞍馬持参詣の土産は、山で採取された火打ち石に人気があったが、その販売方法として採取したばかりの石を畚籠に入れて直接参詣道に運んだ。この光景が鞍馬名物となり、地藏盆の景品

を二階から渡す時などに畚降ろしが再現され、子供たちを喜ばせた。

【畚下ろしの習俗】



稲荷大社初午の畚下ろし（「拾遺都名所図会」） 地蔵盆の畚下ろし

そうじやうがたに（僧正ヶ谷）

鞍馬寺奥の院不動堂から貴船に至る山中にある溪谷。修験者の修行の場で、牛若丸が鞍馬の天狗より兵法を習ったという伝説で著名。義経堂がある。

38 紙

鞍馬から南に下って、京都盆地最北端の地一帯を描く。

（上段）

みぞろいけ（深泥ヶ池）

上賀茂村の東、鞍馬に至る街道沿いにある池。

いちはら（市原）

鞍馬川と静原川が合流する付近、鞍馬から大原に至る街道に沿って拓けた地である。山間部から都市部に荷物を運ぶ人々の姿が見える。

はたえだ（幡枝）

深泥池の北、鞍馬への街道沿いの村。土器師の村として知られる。図はその土器を振売りする者の姿か。

（下段）

いわくら（岩倉）

高野川の上流岩倉川がつくる小盆地の集落。天台宗実相院や大雲寺、石座神社などがある。

なかたに（長谷）

岩倉盆地の北東部を占める小村。

しらかわ（白川）

長谷村から大きく南に下り、東山の如意嶽西麓の白河村を描く。
白川村は近江坂本に至る山中越えの入口にあたり、交通の要衝とされた。

【白川村の事】



御霊神社の剣鉾差し（円光寺蔵「扇面流し図屏風」）「拾遺都名所図会」

『義経記』に京の陰陽師鬼一法眼の弟子湛海坊は北白川に住み「世に越えたる者」とある。祇園御霊会に加わった「白川鉾」（「尺素往来」）。江戸時代初期の「毛吹草」には名産として「切石」が記される。「雍州府志」には

上粟田北白川山土中悉白石也、村民農業之暇事、石工、故隨其用而斫取之、大鑿採者至、長三丈、凡朝廷宮殿之柱礎市廓溝渠之界石并石壁石橋井欄燈石碑碣石塔等物無不用之、其鑿穿時所碎散之砂石至白、是謂白砂

近年まで白川村から剣鉾差しが多く出た。

しやうかう院殿（照光院殿）

聖護院門主の隠居所。

39 紙

高野川沿いの村々を比叡山まで描く。

（上段）

たかの（高野）

高野川の東に沿う地で、後水尾院が修学院離宮へ赴くための道沿いということで寛文一一年頃に開拓されたというから、この図が描かれた頃は若干の集落があったに過ぎないようである。

おはら（大原）

高野川の上流にある盆地に立地する。川沿いに若狭街道が北上する。比叡山の影響下に多くの念仏道場が建立された。村人は薪炭・柴などを都に売りに行き、生計を立てた。柴を売る大原女はよく知られる。

しやうこのあみだ（証拠の阿弥陀）

大原にある天台宗の寺院勝林寺。その本尊を俗に証拠の阿弥陀という。

（下段）

やせ 付かまふろ（八瀬 付竈風呂）

大原から高野川を下った次の集落で、高野川の支流八瀬川に沿って集落を形成する。竈風呂で知られるが、この風呂は蒸風呂で、江戸時代中期頃までは、洛中からも盛んに入りに入った。竈風呂の図様はあまり残っておらず本図は珍しい。

ゑいざん（叡山）

八瀬は比叡山への登山口でもあり、八瀬童子は比叡山へ登る貴人の輿を担いだ。図はその比叡山への道と、比叡山の中心根本中堂付近の景観を描く。

40 紙

近江坂本を描き、再び雲母坂を越えて京都に戻る。

（上段）

さかもと（坂本）

比叡山の里坊として栄えた坂本の町を描く。

さいきやうじ（西教寺）

比叡山の東麓に位置する天台真盛宗の本山。

さんわう（山王）

比叡山延暦寺の鎮守社として栄えた日吉大社のことで、日吉山王とも呼ばれる。この神社の四月の祭礼は、7基の神輿渡御が中心で、各社から降ろされた神輿が、琵琶湖を船渡御することで知られる。

みこしふね（神輿船）

その船渡御の様子を描く。

（下段）

きらゝさか（雲母坂）

比叡山根本中堂から音羽川沿いに京都に至る道で、険阻であったが京都比叡山を結ぶ最短距離の道として知られた。

いしふどう（石不動）

雲母坂の登り口付近にあった雲母寺。本尊が石の不動尊であったが、現在はすででない。

しゆかくじ 付御ちゃ屋（修学寺 付御茶屋）

雲母坂の登り口付近に、後水尾上皇によって、万治五年頃に建立された山荘、修学院離宮のことと考えられる。上中下の三軒の茶屋からなる。

41 紙

京都を離れて宇治を中心に描く。

（上段）

うち（宇治）

茶摘みの様子を描くが、この頃の茶園の茶の木は、現在と違って背丈が高い。

びやうとうゐん（平等院）

宇治川左岸に藤原道長が建立した別業宇治院を、その死後に子の頼通が寺にした寺院。池に浮かぶ鳳凰堂が知られるが、本図は描いていない。

あふぎのしば（扇の芝）

平等院内にあり、源頼政の自刃の地と伝える。

こうしやうじ（興聖寺）

宇治川右岸朝日山の山麓にある曹洞宗の寺院。主要な堂舎はこの図の描かれる少し前に、淀藩主永井尚政によってさいこうされたばかりであった。また尚政は宇治川河畔から山門に至る琴坂周辺や、境内の随所に躑躅・さつき・楓・山吹などを殖栽させたと伝えるが、確かに本図ではその状態が描かれている。



(下段)

まきのしま (槇島)

巨椋池の東岸に位置する。中世までは宇治川の中洲の島であったと思われる。

うじのはしひめ (宇治の橋姫)

宇治橋の西詰にあった宇治橋の守護神。古来多くの伝説がある。

水くるま (水車)

宇治川の急流を動力とした水車。それ歴史は古く、多くの歌などに歌われる。その下部に宇治の布晒しの様子が描かれる。

うじはし (宇治橋)

宇治川に架かる橋であるが、古代の北陸道や、それ以降の奈良街道の橋であるために重要視された。架橋は古く壬申の乱の時には橋守が居たことが知られている。

とうのしま (塔の島)

宇治川の中洲にあり、浮島と呼ばれる二つの島の上流側の島。弘安九年(1286)に奈良西大寺の叡尊によって建立された十三重の石塔が建つ。

かうしやうじくわんわうてい (興聖寺観流亭)

淀藩主永井尚政によって、興聖寺再興時に宇治川河畔に建てられた茶亭の一つ。長川亭・縦目亭・望橋亭・洗心亭があり、その庭はいずれも花で埋められたが、観流亭は牡丹が有名であったようである。

4 2 紙

京都の南、西国街道沿いの集落を南下し、淀城下から石清水八幡宮に至る。

(上段)

とば (鳥羽)

西国街道沿いの集落。横大路に陸揚げされた物資は、この街道を通って京都に運び込まれた。荷車が置かれている。

こひづか (恋塚)

京都六地藏巡りの一つ浄善寺の門前にある袈裟御前の碑。正保二年(1647)に林羅山が撰文して建立した。

よこうち (横大路)

鳥羽の南、桂川東岸の集落。ここより東へ八丁畷という長い道が続く。江戸時代には、大阪から淀川を運ばれた物資が、ここで陸揚げされたので、大いに栄えた。

よどの御しろ（淀の御城）

京都盆地と大阪平野を繋ぐ要衝の地に築かれた城。秀吉が修築して淀君を住ませたことで知られる。しかし江戸時代の淀城は宇治川の島に築かれたもので、秀吉の淀城とは場所をことにする。この城の城主は永井尚政であったが、寛文九年からは石川憲之が移封された。

よどの大はし（淀の大橋）

淀城下は宇治川と木津川の合流する三角州に位置したため、城下に入るには大橋を渡らねばならなかった。

（下段）

八わたのみや（八幡の宮）

男山の山上に鎮座する石清水八幡宮。

山ざき（山崎）

京都東寺口から、大阪に向かう西国街道の宿場町。交通の要衝として、また離宮八幡宮の社領として発達した。中世以来油家業が盛んで、図には家内で油を絞る様子と、その家を訪なう万歳が描かれる。

43紙

京都盆地の西南部、西山を描く。

（上段）

むかふのみやうじん（向日の明神）

向日地区の産土神で、現社名は向神社。本殿は応永二三年（1422）の建設で、明神さんとして親しまれる。

あをのくわうみやうじ（粟生の光明寺）

親鸞上人を茶毘に付した場所に建つ浄土宗の寺院。廟があり、その石棺から光が放たれたというのが寺名の由来である。

おふはらの（大原野）

京都盆地の西南、小塩山の山麓に広がる野。長岡京建設にともない遊獵の地とされ、藤原氏により春日神（大原野神社）が勧請されてからは、善峰寺や三鈷寺など多くの寺院も建立された。

（下段）

をしおてら（小塩寺）

十輪寺と呼ぶ天台宗の寺院で、在原業平の供養塔があることで知られる。この図巻が描かれた寛文年間に、花山院家によって、その菩提寺として再興された。

かちお寺（勝尾寺）

摂津勝尾寺とするなら、あまりに離れすぎる。位置からすれば勝持寺の誤記と思われる。俗称花の寺と呼ばれる桜の名所で、西行伝説がある。足利氏の庇護を受けたが、応仁の乱で荒廢。徳川綱吉の生母桂昌院の助力で寺觀を調えた。

さひぎやうじ（西行寺）

勝持寺不動堂の奥の山上にあったが、現在は境内に移される。西行が出家剃髪し、庵を結んだ所といわれる。

44 紙

同じく京都の西南を描くが、場所的まとまりはあまりない。

（上段）

かたぎはら（檜原）

七条通りの西詰。丹波街道（山陰道）の宿駅。ただし本宿ではないが、西国街道にも抜けられる街道の要衝として知られた。

からはし（唐橋）

檜原からはだいぶ離れるが、丹波街道を京へ辿り、その入口にある西七条村の、西塩小路村を挟んで南に位置する。今日の近郊農村として田植風景を描く。

しおのかうじ（塩の小路）

塩小路は村としては、お土居の西外に位置する西塩小路 村と、お土居のなか、東本願寺の南に位置する東塩小路村があるが、ここは水薬師寺とともに描くから西塩小路村である。

やくしの水（薬師の水）

往古、この付近には大池があり、その池から拾い上げた 薬師如来を本尊として寺院があったが、戦乱で退転。正保年間に京都所司代板倉勝重が再興したというから、この時期は未だ出来立てであった。京都十二薬師の一つとされる。

（下段）

まつのおまつり（松の尾祭り）

松尾大社の祭礼を描く。松尾大社の社殿は次紙にも描かれる。松尾祭りは三月下卯日に神幸祭が行われ、七基の神輿が桂川を舟で下り、三カ所の御旅所に赴くが、内三基は西七条の御旅所に四月上酉日まで留まった。この間能などが演じられて大変な賑わいがあった。図には巫女が神楽を舞う所を描く。

さひほうじ（西芳寺）

松尾大社の南方にある臨濟宗の寺院。俗に苔寺の名で呼ばれるように、早くから庭園が知られていた。

うめづ（梅津）

桂川に面した集落で対岸は松尾。交通の要衝で、丹波から下る材木などの物資の陸揚げ地であると同時に、西国へ船で下る人の乗船地でもあった。

45 紙

桂・嵯峨・太秦など、京の西側の地を描く。

（上段）

かつらの御く（桂の御供）

松尾大社の祭礼では神輿が桂川を下るが、そのおりに桂の住民が御供を献じる。なおこの時神輿や供奉の人は、葵・桂で飾られ、見物が押し寄せる。

まつのお（松の尾）

東に桂川を見下ろす松尾山に鎮座する松尾大社古代の氏族秦氏の氏神でもあったが、中世以降は酒の神として知られる。

のゝみや（野々宮）

天竜寺の北、小倉山の裾に鎮座し、齋宮が伊勢に赴く前に一年間籠もられた場所という。黒木の鳥居があるのが特色である。

（下段）

むめのみや（梅の宮）

梅津の地に鎮座する梅宮神社。嵯峨天皇の後橋嘉智子が、橘氏の氏神として勧請した神社である。

うずまさ（太秦）

古代の氏族秦氏の根拠地として栄えた地で、その氏寺広隆寺が建つ。この寺の講堂は永万元年（1165）の建立で、永禄八年（1565）に縮小されているが、朱塗りであったために俗に赤堂とも呼ばれる。

こくうぞう（虚空蔵）

虚空蔵菩薩を本尊する真言宗の寺院で法輪寺と称す。『枕草子』の「寺は」の段に「法輪」の名があり、早くから貴賤の信仰を得ていた。現在でも一三歳に達した子供が参詣する「十三参り」の風習が残る。

46 紙

法輪寺のある嵐山から大井川、天竜寺を経て釈迦堂・二尊院などを描き、最後は清滝に至る。なお、渡月橋が描かれていないのは、この時期には流されてなかった可能性もある。

（上段）

ほうりん 付あらし山（法輪 付嵐山）

法輪といえば法輪寺と思われるが、すでに前紙で「虚空蔵」として描かれるから、ここは嵐山に続く山の名称と思われる。

大井川（大井川）

桂川の別名で、丹波国を流れ下った保津川が、嵐山の麓で大井（堰）川と名を変え、その後は桂川と呼ばれる。大井川と呼ばれる辺りは、筏によって運ばれた丹波の産物の荷揚げ地であると同時に、古くは嵯峨に別業を構えた貴族たちの舟遊びの地でもあった。

てんりうじ（天竜寺）

後醍醐天皇の菩提を弔うために、足利尊氏が創建した臨済宗の寺院。幕末の火災で焼亡し、現在の諸堂の多くは明治になっての再建である。

さがしやかとう（嵯峨釈迦堂）

五台山清涼寺と号する浄土宗の寺院。奄然によって永延元年（987）に招来された釈迦如来像が信仰されたために、一般には釈迦堂の名で知られる。

（下段）

にそんゐん 付あしひきどう（二尊院 付足引堂）

法然の弟子湛空によって創建された寺であるが、一時期荒廃。室町時代に三条西家など公家たちの信仰を得て再興され、以後殿上公家を檀家として栄えた。釈迦と阿弥陀の二尊を本尊とするが、一般には「親鸞上人足引きの御影」と称される尊像を祀る堂が有名で、多くの信者が参詣した。

ゑんまどう（焰魔堂）

福正寺。嵯峨住民の墓所は、西山の化野と呼ばれた野であるが、福正寺はその入口にあたる位置にあり、小野篁が地獄から娑婆に戻ったといわれる井戸と地蔵尊を祀っていた。東山鳥辺野の珍皇寺に対する寺であり、閻魔像を祀るところから一般には閻魔堂の名で知られていたものと思われる。明治維新の時廃寺となり、地蔵尊は現在清涼寺の境内にある薬師寺に祀られる。またこの寺の付近には「六道」の地名が残る。

きよたき 付ちや屋（清滝 付茶屋）

愛宕山参詣道が清滝川を渡る辺りの集落。橋は渡猿橋と呼ばれ、古くから参詣のための垢離場であり、休憩所・宿泊所として知られた。春の桜、夏の蛍、秋の紅葉などの名所である。